
ポケスペ外伝 水色の瞳

ブルーバード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケスペ外伝 水色の瞳

【Nコード】

N0798N

【作者名】

ブルーバード

【あらすじ】

逃亡生活が続いていた謎の青年 ウイルはある街へとたどり着く。そこから、ウイルスの戦いが始まる。（タイトル変更しました。）

逃亡（前書き）

逃亡生活が続いていた謎の青年 ウィルはある町へたどり着く。そこから、ウィルの戦いが始まる・・・

逃亡

どこまで逃げてきたのかは分らない。分るはずもないだろう。

なぜなら、俺は生憎とのんびりと旅を楽しんでいるヤツらとは違って、タウンマップなんて持ちあわせていない。持っているものさえも、自分が身に着けている黒いローブくらいだ。

こんなものを着ていては、浮浪者や死神のような目で見られるのだろう。いや、実際そんな目で何度かは見られもした。

だが、俺は、それで構わない。

（このさき、俺はずっと逃亡生活をつづけるのだろうか？）

そんなことを考えながら、道を走っていた。

すると、「うん？」町がみえてきた。昼間なので、外にだれもいないわけもなく、子供が何人かが、遊んでいた。

「なあ、おい！」俺はそのなかから、子供を一人呼び出した。

その子は、嫌がるでもなく、「な〜に〜、お兄ちゃん！」と元気にこっちへやってきた。

「なあ、お前、ここがどこだ分るか？」と尋ねてみた。

「えゝ、そんなこともわからないの？お兄ちゃん！ここは、マサラタウンだよ！」

「マサラタウン？」マサラタウンといえば、ポケモンリーグで優勝したことがある図鑑所有者のレッドの故郷として有名な町だ。

「お兄ちゃんてそういえばなんていう名前なの？」

唐突にそんなことを聞かれた。まあ、聞かれたからには答えないといいけない。

「俺か？俺はウィルだ。カンナギタウンのウィルだ。」

逃亡（後書き）

駄文ですいません・・・

出会い

マサラタウン

「へへえ！お兄ちゃんってそんな遠い所からきたんだあ！」

「まあ、そうだな。」

現在、俺、ウィルは、少年A（仮）に名前を教えている。

あんまり少年Aと表現するのも作者が疲れるらしいので、俺は名前を聞いてみることにした。

「ところで、お前の名をまだ聞いていなかったな。」

「僕はね、マルクっていうんだ。」

なるほど、マルクか。

「なあ、マルク。俺はさ、こわ〜いやつらに追いかけてるんだ。」

「こわ〜いやつら？」

「ああ、そうさ。安全な場所を探してるんだ。どっかに隠れるところはないか？」

ダメもとで尋ねてみた。すると、

「わかった。じゃあ僕ん家へおいでよう。歓迎するよう。」

まさかの申し出。だが断るわけにもいかない。

「じゃあ、たのむ。よろしくな！」

「うん！よろしく！」

謎の場所

「えーい！まだ見つからないのか！奴は！」

「いえ、まだ見つかっておりません！」

「くそ！どいうことだ！まだ見つからないとは！」

「プルト様！見つかりました！サターン様のシャカピーで追った所、奴はマサラタウンにいます！」

「よし！A部隊をマサラタウンにむける！」

『ハッ！』

「もう逃げられんぞ。ウィルめ。」

出会い（後書き）

すいません

やっぱり少年Aはめんどくです・・・

V S バット（前書き）

ウィル「おいこら作者！」

はい？

ウィル「なんで更新がおくれてんだよ！」

いやーちよつとまあいろいろありまして。すいません。

更新を停滞させないようにがんばります。

V S ズバット

マサラタウン

僕はマルク。まあいろいろあって、ウィルっていうニンゲンを泊めることになった。
ウィルがこの僕の住みかにきて半日がすぎた。そして唐突にこんなことを聞かれた。

「お前人間じゃねーだろ。」

なんでバレたんだろう。僕のまわりには、幻覚をみせる霧を常に漂わせているのに。

「お前、人間じゃねーだろ。」

唐突にそんなことをいつてやった。

現在、俺は、マルクっていうやつに、家に泊めてもらっている。しかし、さっきから、あいつは喋らない。とりあえず冗談いつてやった。これを基に話はずめばいいな〜と思ったただけだった。

しかし、

「キサマ、なにものだ？」

うつわゝ口調かわった！　は？　嘘だろ？冗談通じないの！？アイツ！

「なぜ、ワタシの正体がクレセリアとわかったんだアアア！？」

てか、女の子だったの！？てかクレセリアだったの！？というかの小説ギャグ路線にはいつてねえか？

「おいおいおいおい！？冗談だ冗談だ！むきになんな！」

とりあえず、落ち着ける。すると、

「えゝ早くいつてよゝお兄ちゃんゝ僕びっくりしちゃったよゝ。」

「雰囲気かわった！？」

「なんかいった？（黒い笑顔）」

「ナンデモアリマセン」

とにかくこいつに干渉しすぎるのも考えものだということがよくわかった。

そのとき、

ドガアアアアン

爆発音が聞こえた。

「なんだ!？」

「お兄ちゃん、研究所からだよ! いったみよう!」
俺も同意し、研究所へ、向かった。

外では、オカツパ軍団。 もとい、ギンガ団が研究所を襲っていた。

ほかには、下っ端Aが、

「この町の住民につぐ! あの研究所のなかにいる爺さんをどうにかされたくなければウィルという人間をここにつれてこい!」

なぐんてことをいつていた。

「ねえ、お兄ちゃんってさ、追いかけてる人ってさあ、この人たちのことなの?」

「ああ、そうさ。」

「なら、ワタシにまかせな! 全員ぶつ殺してやるから!」

そんなことをいった、性格崩壊のマルクがムクホークを出し、Aにむかってつばめがえしをつかった。

Aは、見事に目をまわし気絶していた。

研究所につくと、オーキドの爺さんが、縄でぐるぐるまきになっていた。

そのなかで、下っ端Bがズバットを出し、俺にむかって立っていた。

「ようやく、みつけたぞ！ウィル！おとなしくブルート様の実験台となれ！」

「ことわる。」

「ワタシが殺る。」

「大丈夫だ。俺にはモンスターボールはないが、ポケモンならいる。」

俺の影にな。」

V S ゴースト（前書き）

さあブルーバードのあらすじコーン・・・

ウイル「ちよつとまてい！」

なんですかいきなり。そうぞうしいつたらありやしない！

ウイル「またお前停滞させやがったろ！」

ああ・・・ネタが・・・おもいつかなかったんだよ。

ウイル「言い訳するつもりかあ？」

すいません。

V S ゴースト

オーキド研究所

「俺の影にな。」いってやった。

「はあ？影にはいりこめるポケモンなんているわけないだろが！」
下っ端Bが言い捨てた。あくまでも、俺の頭がどうこうなったわけではない。主人公がおかしかったらだめだろ、と常々思っている作者が頭がおかしい俺をつくるわけがないと思う。

「残念だったなあ。婆ちゃんに鍛えられたからな。出し方はよくわかってるぜ。・・・ゴースト！」

そういつた瞬間、俺の影からひとつの影がとびだしてくる。

「シャドーボール！」

俺のゴーストが、黒い球体を打ち出す。・・・直撃だ。

ズバットは戦闘不能。あっけにとられているBをキャラ崩壊のマルクが捕まえる。

地獄絵図だ・・・

まあそんなこんなでオーキド博士は救出出来た。・・・俺としては複雑な気分だった。

なんてったってうちの婆ちゃんは・・・

「ありがとう！いや世話になったのお！」

現在、俺はマルクと共にもてなされている。まあ、茶をだされてそれを飲みながら話を聞いているところだ。

「いやあいきなりオカツパの集団が来たと思ったら、ウィルはどこだとかいわれてのお！知らんといったら捕まえられてあんなザマじゃ！」

「情けないですね。これでもうちの婆ちゃんと互角に戦った仲間なんですか？」

思ったことが口からでてしまった。

「婆ちゃん？誰のことじゃ？」

まあそうなるよなあ。

いいたくなかったんだが・・・

「キクコです。元カントー四天王のキクコです。」

キャラ紹介（前書き）

ウィル「作者よ。」

なに？

ウィル「順番ちがくね？」

君のキャラとその他もろもろを考えていたらストーリーがけっこう
壮大になっちゃって。

ウィル「それ最初に考えといたほうがいいとおもう。」

キャラ紹介

ウィル 14歳。この小説の主人公。基本的に彼の視点で話が進んでいく。
唯一作者の存在を理解している。

好きなタイプはゴーストと悪タイプ。嫌いなタイプはエスパタイプ。

手持ちは現在ゴーストのみ。

マルク 正体はクレセリア。ある意味馬鹿。表は温厚だがバトルになると残虐な性格になる。

この世界に逃げこんだダークライを探している。

好きなタイプはエスパタイプ。嫌いなタイプは悪タイプ。
手持ちはムクホーク、ネイティオ。

V S ルカリオ

マサラタウン

あの後テキトーに話を済ませ、研究所を後にした。

しかし、マルクに勝負を挑まれた。

「正体を暴き、ゴーストだけでギンガ団を倒したお前の強さを確かめたい。」

・・・だそうだ。

すっかりバトルモード。断ったら何をされるかわからないので、今外でゴーストをだし、構えている。

向こうはルカリオ。

格闘ならば勝てるかもしれないと思った俺の考えは甘かった。

「悪の波動」

全くイヤな技を使いやがる。

しかも連射。

こちらもしャドーボールで応戦。

しかし、まさかのパワー負け。

何発かかすつた。

「催眠術！」

俺のゴーストが相手を眠らせる催眠術を使う。

・・・HIT。

あいてのルカリオはねむってしまった！

「夢食い！」

夢食いはエスパタイプ。効果は普通。

しかし、俺のゴーストは悪の波動で受けた体力をどんどん回復していった。

だが・・・

「ルカリオ！悪の波動！」

いきなり目をあけたルカリオが零距离で悪の波動を繰り出す。

もちろん敗北。

おそらく、ルカリオはすでに目を覚ましていたのだろう。マルクはそれに気づいていた。

恐ろしい洞察力。

・ ・ ・ 強い。完敗だ ・ ・

V S ルカリオ（後書き）

ネタが尽きました。

そして、力尽きました。

しかし、後悔はしていないッツ！

ウィル「なにいつてるんだコイツ・・・」

断章

??????

ハア・・・ハア・・・。

やった・・・。ようやく・・・全部・・・終わった。

あれ・・・？

クレセリア・・・どこ・・・。

「クレセリア！ねえ！どこだよ！クレセリア！」

「だめだよ！クレセリアは・・・もう・・・」

「やめてくれ！クレセリアは生きてる！絶対に生きてるんだ！」

「でも・・・オイラ、見たんだ・・・最後にアイツがクレセリアを引きずりこんで・・・。」

「ヒコザル・・・。僕は認めない。時空ホールは、万が一のことがなければ絶対にそんなことはないはずだから・・・。」

「ポツチャマ・・・。よし！」

僕の相棒と僕とクレセリアはアイツを倒すためにここまで来た。

もし、アイツが活着ているならクレセリアは活着ているのかもしれない。

誤作動が起くるなら、僕と反対にニンゲンになっているか、死んでしまつのもかもしれない。

アイツは……。記憶をなくすのだろうか？

V S ゲンガー

真っ暗な闇。闇。闇。

その真っ黒な闇の中に水色の瞳^めを持ったアイツがいた。

「ヤメロオオオオオオオ！」

アイツが叫んでいた。

俺はそれをずっと眺めていた。

マサラタウン

いつもの夢で目を覚ました。

一体俺の体はどんな構造になっているんだろうか。

何年も何年もこれと同じ夢を見る。

あのポケモンはなんなんだ？ いや、もはやポケモンでもないのかもしれない。

「なあ、ゴース——、」

いいかけて口をつぐんだ。そうか、もうゴーストじゃなかったんだつたな。

「なあゲンガー。」

半日前

負けた……。久々に負けた……。

久々の敗北感が俺の中に流れ込んでくる。

(鈍ったな……。)

そんなことを考えた。

「ウイル。次の手持ちをだしな。」

マルクが俺にそんな事言った。

「何言ってるの？」

「手持ちだよ！て・も・ち！」

「ねえよ。あるわけないだろ。」

「えっ、嘘！ウイルの手持ちってゴーストだけ！？」

バトルモード解除。

「いや……。俺はむこうにいたところは六匹持ってたんだが――、

」

知つての通り俺はあのオカッパ共に追われていた。婆ちゃん――

キクコは俺をアイツらから守ろうと必死で抵抗した。

しかし相手は強すぎた。俺はポケモンを奪われ、キクコは捕まった。

だが、キクコは俺に最後の置き土産を残していった。

キクコのアーボックが『黒い霧』を使ったのだ。

そしてキクコは俺の影の中にゴーストを忍び込ませた。

そのゴーストはシオウ島でグリーンのポリゴンと戦い、敗れたゲンガーの子だったという。

『お逃げ！お前は捕まってはいけない！』

俺は泣きながら走って逃げた。

そのときの事は今でも鮮明に覚えている。

「———というわけだ。」

「ふーん。案外苦労してるんだねウィルって。」

「同情はいらん。同情は……。」

しかしパワー不足も事実だ。どうすればいいのやら。

「あつそうだ。ウィル！じゃあ僕のポケモンとウィルのゴーストを交換しようよ！」

「交換？してどうすんだよ？」

「知らないの？ゴーストは交換すると進化してゲンガーになるんだよ！」

「……そうなのか？ゴースト？」

俺の影に向かって聞いてみた。ゴーストは分らない、といった表情で俺を見つめ返した。

「じゃあとりあえずやってみよう！僕はムクホークを渡すからゴーストわたして！」

妙なテンションのマルクに気圧されながら俺はゴーストをマルクに向かわせる。

マルクからはムクホークが入ったボールを渡される。

「これだけか？」

「これだけだよ。」

何かさっぱりとしない。

何も起こらないじゃないか。

と言おうとした。

——その時

ゴーストが光に包まれた。

ゴーストから光が迸り、光の帯が広がった。

その帯はゴーストの体の形さえも変えていく。

そして光が晴れ——、

俺の相棒は新たな姿を手に入れた。

V S ゲンガー（後書き）

話の流れが急すぎましたね・・・。
進化と交換の様子を文にあらわせたのだろうか・・・？

V S ピカチュウ？（前書き）

ウィル「俺を四カ月間も監禁しやがって…」

人聞きが悪いなあ。更新を放置してただけじゃないですか。

ウィル「息抜きのつもりで東方の小説書いてたら、あっちが本命になっちまったってやつだろ？」

う……………

V S ピカチュウ？

新しくなった相棒に声をかけた。ニックネーム愛称は付けない主義。婆さんと同じように。

ゲンガーをボールから出した。

赤と白の境目から、光のようなものが飛び出し、それがポケモンに変わる。

いつみても、この光景は嫌いではない。

寧ろ、こんなものを200円で販売出来ることじたいが奇跡のような気もする。ポケモンを俺は道具とは思わないが、ワタルさんのやり方はやりすぎていると思う。

ポケモンと人は助けあって生きているのだから、さほど気にする必要はないのだ。

つくづく、人間とは思えない生き物だ。なにかを束縛しているのに、それを大事に扱うのだ。その生物と遊び、その生物と学び、その生物と働き、その生物と戦う。

とまあ、俺は人間なのだから、ポケモンから見れば、人間は違って見えるのかも知れない。

あれこれと考えを巡らしていた最中、

「ウィル〜」

俺を呼ぶ声が聞こえた。マルクの声である。

性格崩壊および自称クレセリアという馬鹿なキャラクターを作った作者のことを少々思い浮かべつつ、扉を開けた。

…… 久しぶりに、この話が更新されているから忘れていたのかも
れないが、この小説はメタ発言がガンガン飛ぶぜ？ 現実に戻さ
れる？ 夢がなくなる？ 知ったこっちゃねえぜ。

これらはやり過ぎると苦情が飛ぶのは分り切ったことなので、作者
に後書きで書いてもらおう。

じゃあよろしくな

V S ピカチュウ？（後書き）

… ウィルさん、僕への当てつけですか？ まあいいや。

メタ発言が多数のこの小説… というか、長らく放置していてすみません。

ネタが尽きてまして…

本格的に、次回から長めの文章になる… はずです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0798n/>

ポケスペ外伝 水色の瞳

2011年10月7日01時41分発行